特集　玉原の自然や動植物と楽しもう

Q.「ブナ」は漢字でどう書くの?

コエゾゼミは昼夜問わず羽化する。見た目はミンミンゼミに似ている。羽が透き通っていて、「ジー」という鳴き声が特徴

初めて見るタゴガエル。恐る恐る近づきながらも、見つめてくるカエルをかわいいと思うように

A. 木が無いと書いて「橅」

玉原といえばブナを思い浮かべる人が多いのではないでしょうか。「木偏に無い」と役に立たないような字ですが、酸性雨の中和、水を溜める、Co_2を吸収しO_2を作り出すなど自然環境に役立ち、残していくことで人間が恩恵を受けるのです。夏休み子供自然観察教室が開かれ、参加者はブナの森で涼みながら動植物と触れ合い、環境保全の大切さを考えました。

「すごい。クマの爪痕、初めて見た」。参加者大人11人、子ども13人は、中心広場を起点とし、キャンプ場ルートから鹿俣山ルートを通りました。

タゴガエルを見つけると、「触ってみるかい」とガイドの古見満雄さん。子どもたちはドキドキしながら、プヨプヨしたお腹を触りました。トンボのアキアカネも捕まえて、自分の指に捕まらせ、羽のザラザラとした感触を指で確かめました。

木の枝などに付き、キノコのように胞子をつくる生物の変形菌も観察。梅雨の後半から見られるツノホコリに、古見さんは「みんなも知っているアニメの冒頭に出てきたよ」と、自然界をテーマにしたアニメーションに触れると、子どもたちはシーンを思い浮かべ笑顔になりました。

クマの爪痕が刻まれた木にも出合いました。中学生の中島徹平さんは、全盲で目が見えない分、敏感に外界を感知します。まっすぐな爪痕はクマが滑り落ち、斜めに入っているものは抱きついた痕と説明を受けると、爪痕を指でなぞったり手のひらで触ったりしました。さまざまな溝の深さを認識できると、表情が明るくなりました。クマが暮らす玉原を歩くことで、クマと人との共存を考えることもガイドツアーの醍醐味です。

同教室は利根沼田自然を愛する会が主催。夏の自由研究の手助けを目的に、昭和34年から続いています。同会は5～11月の毎月第2日曜日に自然観察会も行っています。

玉原湿原は6月、全国草原の里市町村連絡協議会（事務局・長野県小谷村）が主催する「未来に残したい草原の里100選」に、選ばれています。

全身が褐色で所々に黒褐色が混じるタゴガエル。渓流に大きめの卵を産み、オタマジャクシは体長3～6cmで色が白い

玉原に生える木の樹齢は「直径×3」で計算。これは何歳だろう

ブナの木陰で記念写真（キャンプ場）。心地よい疲れを楽しみながら、大人もリラックスした表情をのぞかせる

エゾアジサイは日本海側の山野に生息し、多雪環境に適応して葉が大きい。ブナ帯の湿った場所に生える

オオウバユリは茎の上部に長さ10～15cmの緑白色の花を10～20個付ける

やや透明感があり粉をふいたような形のツノホコリ。1本の長さは数ミリで、枝分かれするものが多い

クマの爪痕が刻まれた木（上）を、手のひらでなでる中島さん（下）。玉原はクマが食べられる植物や生物が多く生息し、自然の豊かさを象徴している。クマは食べた植物の種をふんの中で散布させ、自らも森林を育てている

◆9月の自然観察会
とき　9月10日（日）午前10時～午後3時（予約不要）
集合　玉原自然環境センター前
内容　季節の花や動植物を観察
問合せ　利根沼田自然を愛する会
☎090・2173・7168

チョウに感動 玉原の自然体感して

利根沼田自然を愛する会
古見満雄 さん
―東倉内町―

小学校6年生のときに初めて参加したこの教室の思い出は、迷子になりスジボソヤマキチョウを見つけたこと。羽が開くと上は白く下は黄色で、花びらが飛んでいるかのように見えました。捕まえられませんでしたが、チョウの標本を作ったり生態を調べたりと、動植物に夢中になるきっかけになりました。

まずは自然の中に出掛けてみましょう。驚きや感動が生まれ、自然や生物、人への優しさや感謝につながっていきます。大人も好奇心を持って、一緒に楽しんでみてはいかがですか。

左／古見さんが初めて参加した教室の集合写真（昭和34年7月27日大峰山にて）右／古見さんお気に入りの変形菌は好雪ルリホコリの仲間